

三陸では全てが必要で全てができる

震災前からの課題や震災前の通常時の社会で解決されていない問題、制度不足の問題が、凝縮されて被災地に現れている。

震災前に、社会を守る制度や問題解決のスキームができていたら、今被災地が抱える多くの問題は解決が可能となる。そこで今からでも問題解決そして制度作りを急ぐ必要がある。

議会・生活弱者・自殺防止・教育・防災・物事に向かう姿勢 etc

利潤追求では生き残れない社会

その昔、住民や企業が地域を造ってきた。しかし、それぞれが自己の利益追求を第1と考えるようになったため、地域づくりや行政の運営そのものを役所に丸投げしてしまった。その結果 役所＝行政 となり、役所・住民・企業・団体間の縦の関係がより強固となった。しかし現在の社会状況において、とりわけ東日本大震災以後の社会に置いては、

役所＋市民＋企業＋NPO ＝ 行政 ＝ 市民社会とのパートナーシップ
が重要と考えられる。積極的に協調体制へと向う努力が重要。

価値観の変化

個人 個々	⇒	地域や社会
経営者と社員	⇒	共同経営者
プロボノ	⇒	企 業
生存競争	⇒	生存協調

具現化が重要

具体的な施策と実現が必要。具現化を伴わないビジョンや政策は信用を失い人々に失望をもたらす。

必要事項

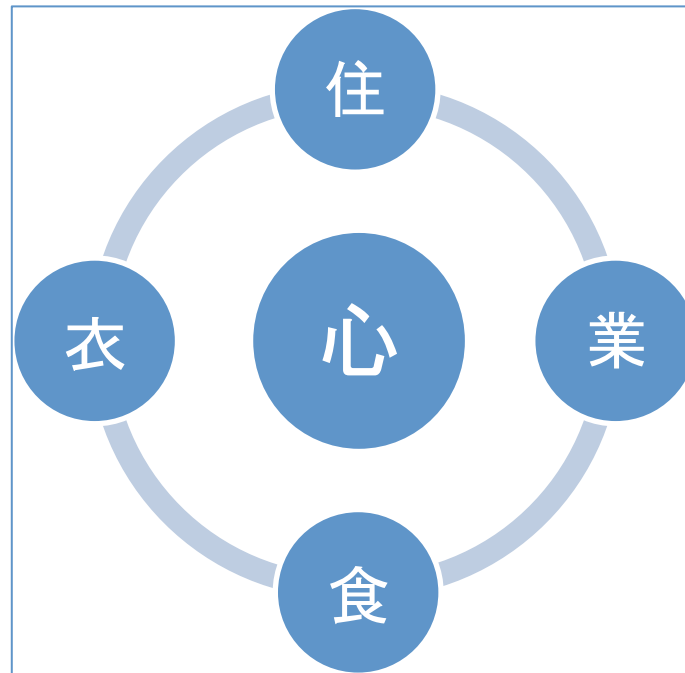
生活再建の具体的で目に見える動きと成果

具体例

- | | | |
|-------|-------------|--|
| まちづくり | ： 工事の進捗状況 | ⇒ 進行しているか。いつ完了するか。 |
| 起 業 | ： 起業の材料 | ⇒ 市場はあるか。経営が成り立つか。
(大規模店舗のメリット、デメリット) |
| 雇用創出 | ： 生活の糧 | ⇒ 働く場があるか。勤められるか。 |
| 住 宅 | ： 家・生活環境と条件 | ⇒ 何処に、いくらで家が建ち、その資金は
どうすればできるのか。 |

仮設住宅入居 ≠ 自立

声のない声を
聴く
見えないものを見る
代弁して結果を
伝える

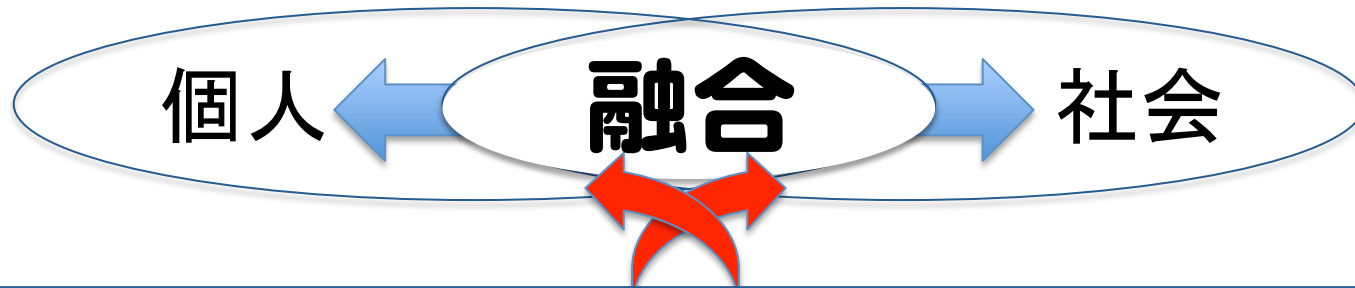


自立には
社会的要素
が必要

弱者は自ら社会的要素をつくれない
社会的要素はどのようにして創られるのか

企業の力
大きい・重要

活動テーマは融合



人 と 人 人 と 地域 地域 と 地域 個人 と 社会
ITエンジニア と 職人(木工・鉄鋼・皮 etc)
デジタル と アナログ ハイテク と ロウテク
プロ と アマ 都市 と 山村 **+ 企業**
一次産業・二次産業・三次産業・消費者 etc

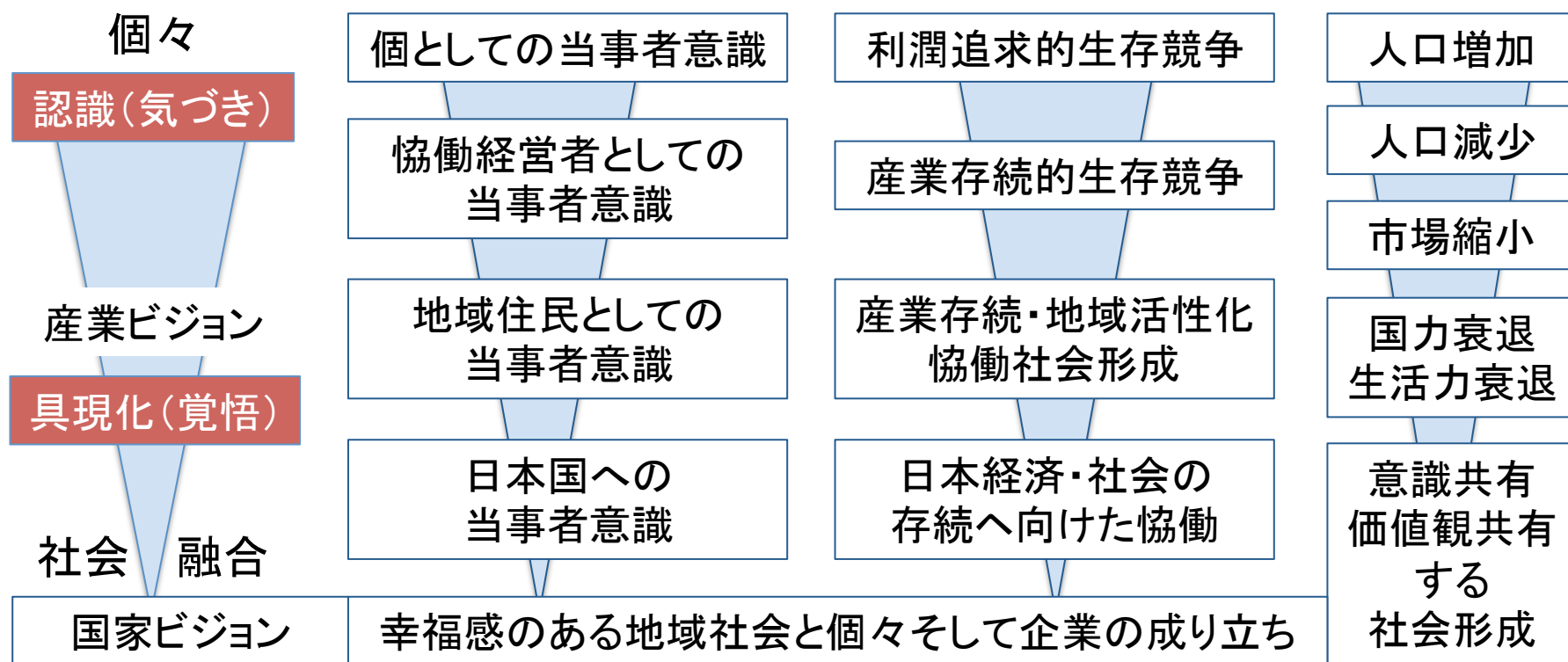
現状： 心と心 人與人 地域と人 国と国民が分断し始めている。



目指すもの：今まで相見えなかったもの、まみえ難かったものが融合してゆく。
同時に分断したものが再び融合する。

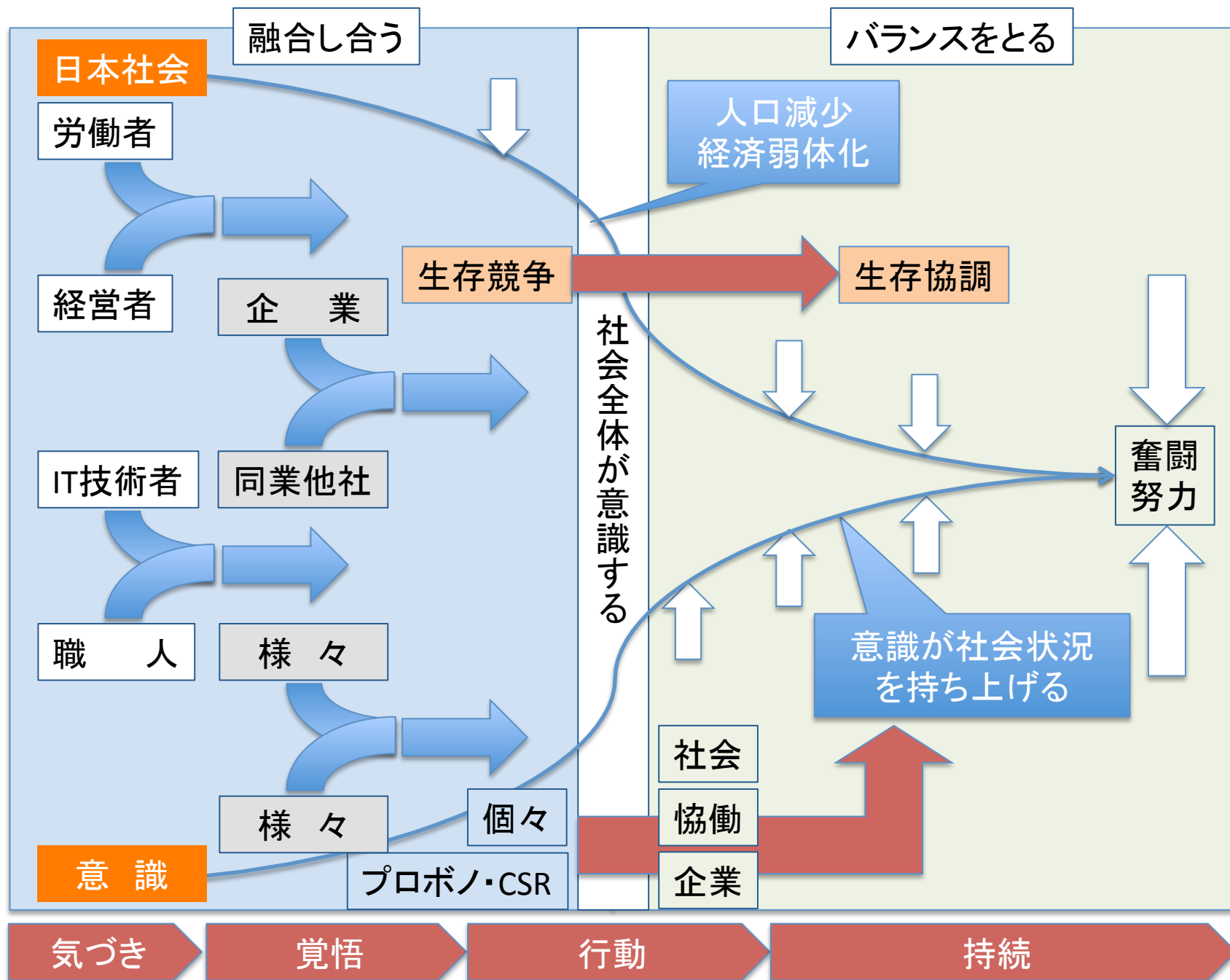
当事者意識の起点は気づき、気づきの深さは覚悟

近代主義・経済成長主義



定常型社会

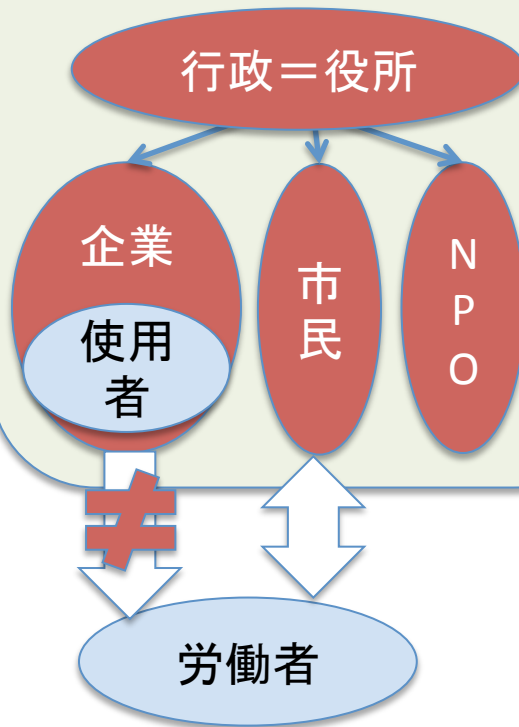
人と企業・企業と企業・企業と市場(地域)のバランスが必要となる。
プロボノは、道しるべであり、第一歩である。



企業の内部も同じ・社会形成

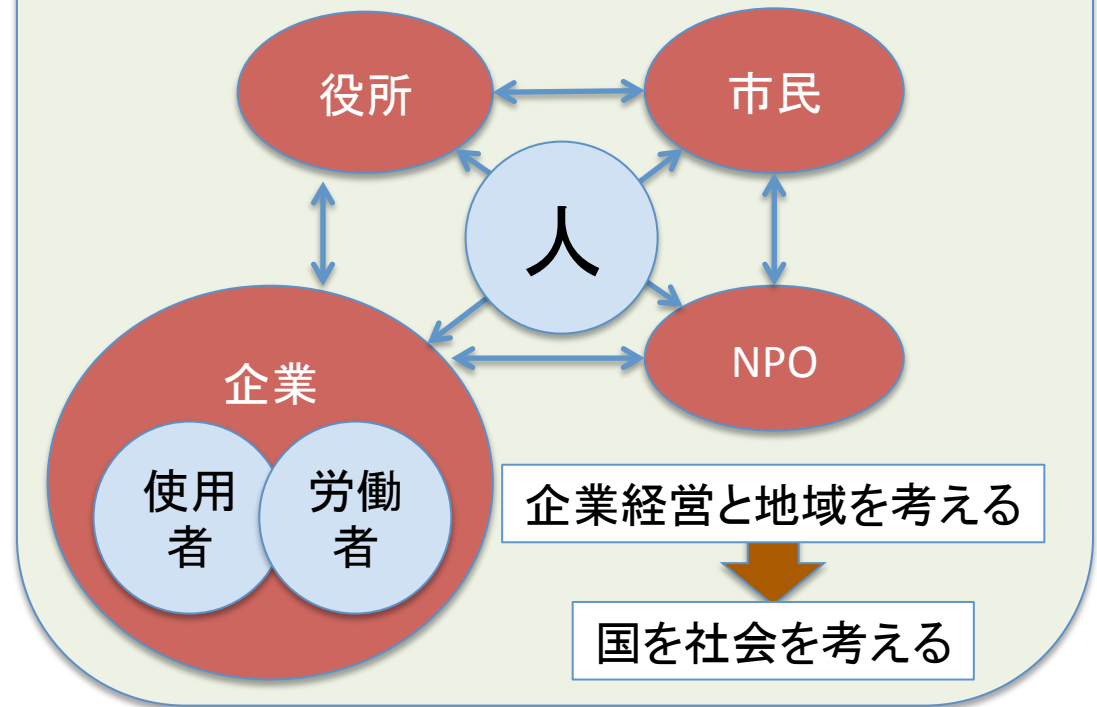
① 現在社会多く

役所が行政そのもので
他は行政ではない



② 柔軟な社会と行政

この協調を行政と考える。役所 ≠ 行政



企業と結びつくと同時にその中の人(個々)と結びつく事により
企業と個々の結びつきが一層強くなる。CSR等

価値観の変化

帰郷・同居等々

コンパクトシティー化

スモールニュータウン構想

共同生活・協働社会

核家族化・個人主義

人口減少・高齢化

店舗・企業の生存

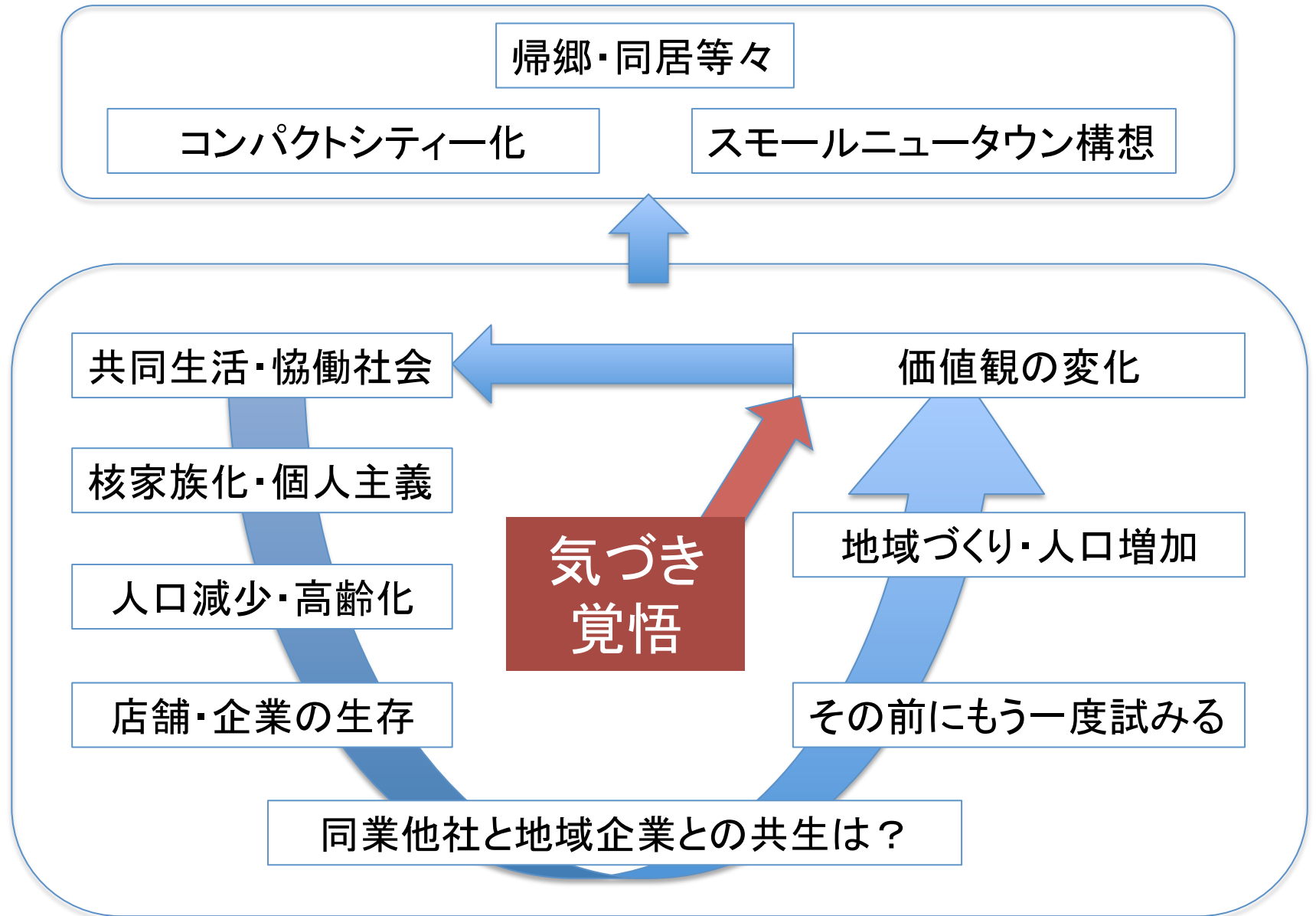
価値観の変化

地域づくり・人口増加

その前にもう一度試みる

気づき
覚悟

同業他社と地域企業との共生は？



自然エネルギーを活用した郷づくり

コミュニティ施設＋避難施設
遠野まごころネットモデル

まごころ助けあいセンター

平常時はなりわいとコミュニティ創造の拠点
非常時は避難施設にもなる

「自然エネルギー事業の主旨」

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、岩手県沿岸市町村は甚大な被害を受けた。かつての市街地は壊滅状態に陥り、発災から2年超の現在においてもなお復興にはほど遠い状況である。瓦礫の撤去が終了し、ライフラインの復旧が達成されつつある現在、復興のために必要なのは、仮設住宅等へ避難している被災者の住宅とコミュニティ再建と、震災により失職した被災者のための「なりわい」作りとコミュニティの再建に関連して、災害に強く、自然エネルギーを用いた、自然と共存した自給自足の助けあいの場を提案することが本事業の主旨である。

「まごころ助けあいセンター」

被災地におけるコミュニティの崩壊（地域互助機能の不全）や雇用の問題（求職と求人のミスマッチ）を解決するため、当法人が大槌町で建設を進めている施設が、「まごころ助けあいセンター」である。これは工房、食品加工場、レストラン、健康施設、事務所などが併設された複合施設となるが、その電力を自然エネルギーで賄うことを試みる。「まごころ助けあいセンター」の建設地は風が強い谷間に位置し、傍らを流量の大きい大槌川が流れている。「復興の家」で試験する風力エネルギーと「米通自然エネルギーLAB」で試験する水力エネルギーの双方を利用した発電が可能である。社会施設の電力が自然エネルギーで賄い得ることを被災地で示し、災害に強く、自然エネルギーを用いた自然と共存した自給自足の地域づくりの提案に繋げる。

大槌はーぶの郷

Ohtsuchi Herb Village

自然エネルギーを活用

レンズ風車



まごころ
助けあいセンター



レンズ風車
設置風景



ハーブ園の整備

ボランティアとの農作業



大槌ハーブの郷

ハーブ園
新たな観光名所の
創造

工房
新たな特産品の
創造

創

助けあい
センター
コミュニティの
創造



工房での作業風景

コミュニティハウス竣工写真



大槌はーぶの郷

Ohtsuchi Herb Village

自然エネルギーを活用した 持続した運営を目指す

「まごころ助けあいセンター」

なりわいとコミュニティづくりの拠点を建設・運営する。

- 工期：2013年7月～10月予定
- 施工主・事業運営主体：遠野まごころネット
- 事業内容

地元の農作物や海産物を使った“海鮮餃子”などの食品加工や機械組立てによるなりわいの創造を行っていきます。

＋6次産業事業認定

外観



内部鳥瞰図



コミュニティステーション部分 床面積：223.58㎡（67.50坪）

餃子工房部分 床面積：55.89㎡（16.87坪）

後工事部分 床面積：22.35㎡（6.75坪）

延床面積：301.84㎡（91.12坪）

平面図



大槌は一ぶの郷

Ohtsuchi Herb Village



レンズ式小風力発電を中心に電力を
まかない、不足電力を購入する



まごころ助けあいセンターの内容

木造平屋建 延床面積：301.84㎡(91.12坪)

現状問題点

今
画一化し、枠の中におきたがる。
理論付け概念化をしたがる。
利権としての権力死守する。
自分の枠を超えさせない。
自分の能力の範囲内におく。

状況を知らない。知ろうとしない。知りたくない。人の意見を聞くのは恥、威厳を失う。

決断の礎が欠如している。自分と社会が融合しない。

頑張っている、理解しているつもりが体にしみ込んでいる。気づいていない事に気がつかないから、有効な政策やビジョンは生まれ難く、実現につながり難い。

やれないこと、やらない事の話は聞き飽きた形式と実質の議論はかみ合ったように見えるが、実行が伴わないから始末が悪い。罪なし

覚悟がない

気づきがない

覚悟できない

権力・私心を
すてられない

正確な情報で
現状をしる。

リーダーは
自分が陥ら
ないように常
に注意する

国・政府・官僚

県知事・地方官僚

市町村
公務員等は家来
住民・団体他は領民
大企業はお客様

一方通行で聞耳ない

結果：指令、強制

昭和以前と同じ、民
主主義ではなく封建
主義反論を許さない。

政策・ビジョンのもとを形成する。

リーダーのもと実現を目指す。

リーダーシップとは、現状を理解し、
気づかせる事であり、進められる事。

社会的企業や産業の成立

企業の現実

経営の現実・経営活動

労働の現実・働き方

政策・法規

労使共通課題の形成

問題提起

経営理念・価値

社員や組合の活動

企業政策実現機能

実現したい
産業の状況

環境・時代認識

当事者意識が起点

環境・時代認識がなければ
労使共通課題の形成はできない

時代の転換点

認識できれば
時代の転換点
も理解できる

社会や企業の
向かうべき方向

社会＝協働社会の
向かうべき方向がわかる

個々

融合

社会